

巻頭言 「なつかしい声」

宇野 元

スヴァトスラフ・リヒテルの来日リサイタルの日、のんびりした青年が渋谷のNHKホールにむかうと、どうもおかしい。人がまばらであるのに気づいたのは、ようやく入り口に近づいたときでした。建物の外に係の人たちが立っていて、なにやら書かれたものが張りだされていました。「まことに申し訳ありません……。」このときをのがしてのち、キャンセル魔の異名をもつ名ピアニストの生演奏に、ついにあずかる機会がありませんでした。

牧師館の書棚に、リヒテルが1986年にイタリアで行なったリサイタルを収めたCDがあります。シューマンのピアノ曲だけで構成されたタペ。ふと思いたって耳を傾けると、新鮮な感覚が呼び醒まされます。亡くなった音楽家の音が、生きている。姿こそ見えないながら、今、ここで演奏しているよう。古い音響機器によっても、いつのまにか、手元にあるわずかなCDの多くがすでに世を去った人々の録音になっていますが、書棚から取りだしてステレオのスイッチを押すと、過去の時がよみがえるのを感じます。

東京の家族より、お隣のおばさんが引っ越しをされるとの知らせがありました。親しく名前を呼んでくれた数少ないご近所の方がまたいなくなります。十年前、ご主人が亡くなられたとき、おばさんが会員でいらっしゃる教会で葬儀がおこなわれ、参列しました。そのときの説教が思い起こされます。——ご主人の声、記憶のなかの愛する人の声が、残された私たちの心に響きつづけるだろう。その声を思い起こすとき、私たちは、その人の背後に、その人を愛してやまないイエスの御声をおぼえるよう導かれる。そしてその人と共に、私たちもイエス・キリストにある神の愛の中にあるのを知るよう導かれる。

仕事机の椅子に腰掛けてこれを打ち込んでいたら、ステレオによるリヒテルのリサイタルがそろそろ終わりにさしかかっています。シューマンの憧れ、熱情、内省の軌跡のあとに、最後の曲、ナハトシュトツケ第4曲（作品23-4）が、ゆっくりと、一音一音噛みしめるように聞こえています。手を休めて、『讚美歌』第83番「めぐみのひかりはいたらぬくまなし」の原曲に耳をすまします。